

発見! おごおり遺産

No.3 旧筑前街道と横隈宿

現在も街道ウォークで人気の薩摩街道。実はこの道が整備されたのは江戸時代前期の1670年代で、それ以前は宝満川西岸の旧筑前街道が地域最大の道でした。今回はこの旧筑前街道を紹介します。



中世～近世前期に使用された道



横隈に残る北の枡形

現

在の道路は、国道3号、国道500号のようにそれぞれ固有の名前が付けられていますが、江戸時代の道は、東海道・中山道などの一部を除いて、名前は決められていませんでした。当時は、その道がどこに向かっているかで通称を付けた例が多く、私たちが使用する「薩摩街道」も、熊本では「豊前街道」と呼ばれるなど、地域によって呼び名が異なります。

今回紹介する「旧筑前街道」は、筑前へ向かう古い道という意味で、江戸時代前期に宿場町だった横隈の名前を取って、「横隈街道」と呼ばれることもあります。この道は、古文書に「大道」と記されるなど、薩摩街道ができる前は「天下道」(参勤交代道)でした。ルートは、南から赤川↓十楽↓京手↓司家↓長松↓用丸を通り、旧横手橋付近で宝満川を渡って、大崎(七夕神社)↓小板井↓大板井↓大保↓新島↓力武↓横隈宿↓津古へと続きます。

横隈宿は、薩摩街道成立によって宿場町としての役目を終えましたが、現在でも通り沿いには「柳屋」を始めとした歴史ある建物が残されています。町

の南北の入口にある枡形(わざと屈曲させた道)は当時のままの姿で、横隈公民館の場所には参勤交代中の大名などが宿泊する「下の御茶屋」があったと考えられます。町の周囲には宿場の防御のために植えられた竹林も残り、往時の雰囲気は今に伝えています。

旧筑前街道がいつから主要道になったか記録はありません。しかし、この街道沿いで行われた発掘調査では、鎌倉時代や室町時代の集落が多く確認され、少なくとも中世まではさかのぼるようです。

一方、宝満川東岸にも古い主要道と考えられる道があります。地図に赤色で表したルートで、下鶴↓吹上↓干潟↓乙隈と続きます。中世の吹上城や乙隈城などは、現在に残る大木戸・大門といった地名から、この道に向かつて城門が開いていたことが想定され、当時は地域に欠かせない道だったようです。

現在も往時の雰囲気が残る味坂・大保・横隈・吹上・乙隈などを歩いて、中世から続く歴史を感じてみませんか。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと